

よきおとずれ

カトリック釧路教会だより
第14号 2019年4月21日発行



1本の電話

洗礼者ヨハネ 内藤 孝文 神父

今年になって、教会の受付がない時や夜間などに、教会宛での電話があった場合には、緑ヶ岡の修道院に転送できるようにしています。ボイス・ワープというシステムです。それ以来、電話を受ける時、「修道院ですか?」、「教会ですか?」と言われる場合はよいのだが、それが無い場合、「修道院です」、「釧路教会です」、どちらで応えていいのか迷うことがあります。

或る日の夜、1本の電話を受けました。「黒金教会ですかあ〜? 実は私、黒金教会の信者なんですけどお〜、今年の復活祭はいつで、ミサは何時からですかあ〜」という内容だった。この人・・・本当に・・・という心の中の湧き上がってくる思いを隠して、私は親切・ていねいに対応しました(クリスマスや復活祭が近づくと、必ずこのような電話がある)。

復活祭(主の復活の主日)は、もちろん

大切です。主の復活は、キリスト教信仰、そして教会が存在する基礎の核心だからです。

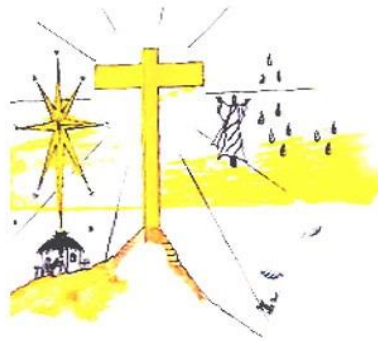
でも、主の復活は単独では有り得ないのです。イエスの受難と死があって、主の復活があるのです。

教会は、聖なる3日間「聖木曜日(主の晩餐)、聖金曜日(主の受難)、聖土曜日(復活徹夜祭)」を典礼の頂点に位置付けています。そして主の復活(復活祭)があるのです。

また、受難・死・復活という一連の出来事を「主の過ぎ越し」とも呼んでいるのです。

私達は、どうしても主の復活に目がいてしまいがちです。

しかし、その前に、イエスの受難、死があることを忘れてはならないし、もう一度思い起こす必要があるのです。



ラザロ神父様インタビュー③

思い出すまに

「祈り」についてよく訊かれます。祈りは一人一人違います。祈りは神と繋がること、神と心で一致することです。ですから祈りはなくてはならない心の糧です。これは頭で理解するのではなく、自分の努力によって身につくものです。

祈りに満足してはいけません。自己満足は危険です。いつも足りない、まだ足りないと思うことが、神との親しみを増してくれます。祈りを通して頂いた光がより輝くように、神はヒントを与えてくれます。それを育て、試練を通して、祈りの貴さ、価値、素晴らしさに気づきましょう。

現在の社会情勢を考えると、自然災害、家庭崩壊、少子高齢化、教会への迫害、信者の減少、若者の教会離れ、司祭が足りない…等々。様々な問題が起きています。これを解決するのは祈りしかないと思います。私達はもっと祈りをしなければならぬ。もっと神とふれあうこと、そのふれあいが楽しくなるように、一日中神とつきあうこと。食事も買い物も神とつきあうことです。信仰の眼をもってするなら、病人のお見舞いも優れた祈りになります。ただ義務的に朝晩の祈りをするのではなく、心で、身体で祈りましょう。

それからもう一つ、私が皆さんに望むことは、もっと聖体訪問をしてほしいということです。御聖堂に行くことは、イエスさまとお話しすることです。イエスさまは淋しがっておられます。私たちの愛を望まれています。

私の経験をお話すると、ある夜、修道

院の御聖堂でイエスさまに挨拶して帰ろうとした時に“一人ぼっちにしないで”という声がしました。イエスさまが私に話しかけてくれたのです。神との絆を感じた一瞬でした。その時から私の信仰が変わりました。前よりも強く深く神に親しみを感じ、信仰を生かすために聖体訪問を増やさなければならぬと感じました。御聖体訪問がミサを捧げるときの私の支えとなったのです。



十字架の前で、自分の全てを神に委ねましょう。自分の苦しみをイエスさまの苦しみに合わせるのです。神は必ず応えてくださいます。十字架から愛が溢れてきます。アッシジの聖フランシスコは、十字架のキリストに生き、十字架のキリストのうちに死にました。

もっと真剣に祈りましょう。聖体訪問を増やしましょう。人との関係も神の愛をもって行ないましょう。そうすれば家庭も、教会も、社会も、より良く変わっていくと私は信じています。

“イエスさま、最後まで忠実にあなたに従う恵みをお与えください” (終)

(文責 堀内 優子)



「キリストの道」へ踏み出す

アッシジのフランシスコ 持田 誠

2018年12月25日は、私の生涯にとって忘れられない日となった。この日の御ミサで、私の勝手な都合に合わせて、約1年に渡る学

びを導いて下さった渡辺神父様から、悲願だった洗礼を受けることが出来た。受洗の希望を抱いてから、実に20年以上の歳月が経過していた。



神を意識し始めた大学生の頃、当時出入りしていた救世軍札幌小隊で、ホームレスの人々への炊き出しを手伝った。ごく稀ではあるが、神の働きかけが実り、信仰を持つようになる人がいる。そうした人々の、顔つきまで変わっていく生き方の変化を、ほかにも多くの場面で見ることがあった。その度に、自分の信仰は字面だけのものであり、「キリストを生きる」という根源的な部分を避けている、という事に気づく。

「キリストは道である」と言う。「イエスにしたがって生きる」ことこそが信仰の本質である。いくら書物を読み漁っても、それはキリスト教「学」を学んでいるに過ぎない。いくら教会を訪ねて礼拝やミサに出かけても、それは外側から信仰を眺めているに過ぎない。自ら信仰を証し、キリストと共に、キリストを生きる道に踏み出さない限り、そこに真実の信仰は無いのである。私は、表面的に信仰の形を繕っているだけの、卑怯で臆病な人間であった。

職業柄、日曜日に教会へ足を向ける事の出来ない環境にあることも、私に都合の良い言い訳を重ねる原因となった。だが、キリストの信仰者たちは、苦難は忍耐を、忍耐は練達

を、練達は希望を生むということを知っている〔ローマの信徒への手紙第五章〕。苦難のときにこそ、キリストの道に踏み出すのが信仰者のはずである。

いま、ずっと裾野を巡り続けながら、足を踏み込めずにいた信仰という山の登山道へ、ようやく立ち入ったところである。いまからが、「キリストを生きる」という山登りの始まりである。

アシジのフランシスコには程遠いけれども、イエスに倣って生きる者の端くれに、ようやく立てたこの日の喜びを、私は決して忘れないと誓うのである。



100歳を迎えて

ミカエル 塚 宏

東京立川市上砂川町、当時のどかな田舎町に大正8年、私は生まれました。4歳の時に関東大震災も経験しています。

父親は養蚕をしたり鉄鋼業を自営したりしたアイデアマンでした。先進的な人で、カトリックに入信した父親は私にも洗礼を受けさせました。太平洋戦争が始まると私も召集され、満州に衛生兵として渡りました。幸いにも無事に帰還し戦争も終わって、千葉で働いていた時に妻である信子に出会い結婚しました。妻にはその後、富山や北海道など私の会社の事業に付き合わせて大変苦勞をかけたと思います。二男一女をもうけ、忙しく波瀾万丈な壮年期を過ごしました。教会からすっかり遠ざかっていた私を、結婚後カトリック信者だったと知らされ驚



いた妻が教会に誘ってくれ、二人そろって信者として再出発することができました。

新川教会ではあたたかい信者の皆さんや愛情あふれる歴代の神父様達に囲まれ、平安な日々を取り戻すことができました。

そんな中、東日本大震災の起きた平成 23 年 3 月末日に妻を亡くしました。その後すぐ病気がちだった長男も神に召されました。ともに歩んだ妻と大事な息子がそばにいないことは悲しいことですが、二人が今も神様と一緒に私を見守ってくれているだろうことを思い出し、こうして無事 100 歳を迎えた感謝の気持ちを神様にささげたいと思います。



宮古より愛をこめて

マリア・カタリナ 溝口 久恵

宮古市のゆるキャラ「サーモンくん」「みやこちゃん」のお人形との出会いは 5 年前になります。さをり織で作られたこの人形は、東日本大震災からの復興の願いをこめ、宮古市浄土が浜の仮設住宅で生まれました。

～宮古より愛をこめて～をフレーズにひとつ

ひとつ丁寧に出来上がっていて、さをり織りのあたたかさを感じます。

この サーモンくん と みやこちゃん をたくさんの人達に お知らせできれば…と思い、フェイスブックに投稿してみたところ「それ何？」から始まり、たくさんコメントを頂き、また、巡礼友達に手渡しすると、それがまた色々な方々へと繋がってまいりました。サーモンくん と みやこちゃんは、イタリアの巡礼旅行にもお供したそうです。そして、ローマにお住まいの日本人ご夫婦の所にも同居しております。

広く広く、復興の願いを伝えられますように～アーメン



サーモンくん

みやこちゃん

編集後記

ご復活おめでとうございます。

長く寒かった冬も終わり、今すべてのものが新しい命を噴き出す時です。私たち信仰者にとっても霊的な「冬」を体験する時があります。信仰上での悩み、教会・職場・家庭での人間関係等、様々ですが、その思いは私たちの心を閉ざさせます。自然界の冬は一時的なものであり、時が来れば過ぎ去ります。私たちの中にあるこの「冬」もご復活の喜びのうちに、信仰の命を強め輝かせる糧となるようにしていきたいものです。(M.W)

カトリック釧路教会 〒085-0018 釧路市黒金町 12 丁目 10

TEL 0154-22-5823

FAX 0154-22-5832

教会だより 編集：広報委員会